

木曾地域の高校の将来像を語り合う会 会議録（発言要旨）

令和元年8月30日（金） 午後6時00分

木曾町文化交流センター 大会議室

出席者

学校関係者（小中学校PTA代表者、中学校長）6名

- 1 開会
- 2 自己紹介
- 3 日程及びねらい
- 4 高校改革～夢に挑戦する学び～ 県教委～説明
- 5 高校の状況について 木曾青峰高等学校、蘇南高等学校からの説明
- 6 意見聴取

○出席者 少子化がこんなにも進んでいることに認識不足がありまして、今の状況に愕然として、認識の甘さを痛感しているところでもあります。基本的には高校を考えていく上で、地域の子供たちがその地域の高校に通えるのが一番いいと思っておりますが、2030年までに155人まで中学校の卒業生が減ってしまうという現状を見ると、将来的には木曾地域の2校存続ということも危ういのではないかと痛感しております。

将来的に木曾地区で高校が1校になるのも、やむなしと考えますが、その中でも蘇南高校がやっている総合学科は、1年生は全て普通科に入学して、2年目までいろんな経験を生徒たちにさせて、その中から自分の進路に合った選択をして専門課程へ移行できる形が望ましいと思っております。そうしたほうが少人数授業になったりして、いろんなことが探求できると考えています。

仮にそういう1校体制になったとすれば、木曾青峰高校、蘇南高校ともに歴史がある学校ですが、それに縛られていたら何も進まないのもので新しい校舎を建設していただきたい。

○出席者 自分が高校生だったときは、近くにある高校に入って、その後進学するなり、就職するなりというのが普通だったが、今は自分のやりたいことがあれば郡外へいってもいいということも普通になってきているので、魅力のある高校になるということもすごく大切ということを感じます。

都市部は人数もいるので、いろんな選択ができる場所があると思いますけれど、

中山間地、特に過疎地については、選択できる幅すらもない状態になっているので、自分たちで考えてやれるという幅広い教育ができる場所があることが大事かと思います。親としては子供たちに楽しく学校へ通ってもらいたいという願いがあるので、楽しく通える高校であってほしいと思います。

○出席者 木曽地域、一昔前でしたら山林、林業が営みであったものが、ここ100年たたないうちに、これだけ衰退してしまった。

木曽も一昔前は11町村あったのが今は6町村。面積的には四国の香川県に匹敵するような面積になるわけです。それを1つの高校にまとめるというふうになると、1時間でも1時間半でもかけて通学しなければならない。

1つの高校へ通わなければいけないということになると、それだけの負担がかかる。AI、インターネットがこれだけ普及してきましたので、インターネットを使って卒業の資格が得られるといった観点も考えていただいて、僻地に住んでいる人でも、平等な学習を考えていただければと思います。

○出席者 木曽の2つの高校は、普通科高校の特色も出さなければいけないし、専門高校の特色も出さなければいけないという、大変難しい教育課程をつくってやっていただいていると思っています。その良さをどのように広げてわかってもらうかが今後の大きな課題と思っています。先日、蘇南高校のホームページを見させていただきましたが、校長先生自らブログを毎日のように書いておられて、そういうことがもっと広がって青峰高校や蘇南高校の良さが伝われば、木曽の外からも入ってきてくれるのではないかと思います。

仮にこの2校が再編によって1校にまとめられてしまうと、これは大変困ると思っています。青峰がなくなってしまうたら、木曽町中は塩尻か松本に行くか、蘇南高校に行くかということで、これは距離がありますし、蘇南高校がなくなってしまうということになると、その地域の子供たちが県外に流出する可能性が大変高くなると思います。地元の子供を地元で面倒が見れないというシステムが何とかならないかなと思います。なので、ぜひ2校体制は維持をしてもらいたいと思っています。

これは1つのアイデアですけれど、中高一貫校が今、県下に幾つかあるわけけれども、附属中学をつくって高校にそのまま上がるパターンの一貫高校ではなく地域の中学校が簡単な試験によって高校に入ることができる、地域連携型という中高一貫型もあります。そのシステムを入れ、例えば木曽町中学校の子供たちが、簡単に試験をするだけで青峰高校に入るといって、7割の進学率がこれが8割5分くらいに

なることもないことはないのではと思います。

- 出席者 3点ありまして、1つは木曾の地理的な条件から、2校は可能な限り地域としては残して欲しいと考えております。理由としては、子供たちの学びの場の保証ということが大前提なので、やはり選べるというのが生徒たちに非常に大きいことなので、ぜひ2校はあって欲しいと思っております。

それから2点目。生徒と保護者がどんなニーズを持っているのかということをしサーチしてみる必要があると思います。少子化が進んで子供の人数がかなり少なくなってきているので、どういうニーズを持っているのかということをしサーチしたり、それに応える、生徒が行きたい、保護者が行かせたいという教育課程を組んでいく必要があると思っております。文系上位生の受け皿を普通科の中でも何かコース制とか、特別進学とか考えていく必要があると思います。

それから3点目、木曾地域の課題を生徒たちにも学んでほしいし、よさも学んでほしいし、その両面を小中高の中でしっかり学んで、木曾のよさ、木曾の課題を将来にわたって考えていくような素地をつけていく必要があると思いますので、地域と密着した内容というものをしっかり扱って、将来一旦木曾から出ることはあるかもしれませんが、大人になって戻ってきたいと思う根っこは、小中高の学習の中、御家庭の中にあると思いますので、そういうものは大事にしてほしいと感じております。

- 出席者 学校の存在が地域に及ぼす影響について、その地域に学校があるということがどれだけ地域にとって大事なことかということをし共通認識をもって言う必要があると思います。とりわけ高校は、社会への出口の一端を担うことを考えると、その地域に高校があるかないかということが地域の経済的な活性化と大きく直結すると思います。2校ある高校が1校なくなるということになると、その地域の経済的な地盤沈下はかなりな影響があるのではということをし考えると、これからの木曾郡のことを考えれば、どうしても高校が2校あってほしいという思いがあります。

また、木曾郡の地理的な特徴としては、南北にとっても長いので、1つの学校になってしまったために、なくなった側の地域の子供たちがどんな不利益をこうむってしまうのかということをし、しっかり考えていく必要があると思います。

その上で、この春に卒業した今の高校1年生の動向がとても気になっています。青峰高校も蘇南高校も入学生徒数がすごく減ったと思います。校長会が把握している範囲だけでも郡外、県外に流出した生徒数は60名を超えています。この子供たちが青峰、もしくは蘇南に全員入っていたら、雰囲気も変わると思うけれども、ど

うしてその子供たちは郡外、県外に行ったのかということをよく考えてみる必要があるのではないかなと思います。

2点質問をお願いします。先ほどの県から説明のあった特色や魅力ある普通科について、具体的にはどのようなことを考えているかということが1つと、研究指定校を設けて進めていますという件について、青峰高校が高度産業教育推進校ということになっているという話がありましたけれども、この研究指定校の結果を受けて、県で方向性を出していくのはいつごろになるか。

○県教育委員会 私どもが考えていることとすれば、一律普通科ということで、ただ普通科目を均等にやるということではなくて、例えば地域で維持していきたい伝統芸能みたいなものをその学校の教育活動の中に位置づけて、地域とともにそういう担い手を育てていくとか、伝統産業とか、そういったあり方を各校で考えて打ち出してもらいたいと考えているところです。普通科の中にもいろんなバリエーションがあっていいし、子供たちにはそういう中から選択できるような、環境が整えられていけばと考えています。

研究指定校の期間であります。現在、木曾青峰を指定して研究開発プログラムというものを本年度つくっていただいて、年度末にはまたさらに実践校というものを指定する予定であります。研究校が実践校に移行するというような、普通に考えればそういう形になるかと思うんですけど、その研究開発計画に基づく期間というのは5年ぐらいを想定しているとお答え申し上げます。

7 意見交換

○出席者 サテライト校という言葉が県でよく使うようになりました。簡単に言うと分校とは違う感じ。そのサテライト校にするメリットとか、何で今まであった学校がサテライト校に変わるのか。それをやることによってどんなメリットがということを見せてもらいたい。

○県教育委員会 サテライト校というのは、6月の県教委の定例会に、現在の望月高等学校を通信制のサテライト校とするという計画を付議して承認された、その中に出てきている言葉です。望月高校は来年度末で閉校を決めているんですけど、その施設、設備を活用した形で通信制のサテライト校にする。その定義というのは、分校とは異なります。サテライト校というのは、あくまでも本校の分教室というような位置づけで、本校とは別の場所に置くというようなところです。

そのメリットなんですが、そこに通信制の教室ができることによって、その利便性を図るといえるのか、本校に行かずに学べる場所ができるというような、そういうメ

リットは生徒に対してはあると思います。

このサテライトという言葉を使っているのは今望月だけなんですけれども、ICTとかそういったものを導入して、先進的な学びをしたいということで、遠隔地においてインターネット等を利用した学習もサテライトでは行う予定で、新しい取り組みの1つのモデルケースにできると考えているところです。

○**県教育委員会** 先ほど幾つか御発言いただいた中で、各校のよさ、また木曾郡の子供たちや保護者に伝わるようにというふうなお話もあったんですが、今日は学校の校長先生、教頭先生見えているので、こんなふうに地域に伝える手だてもおもしろいのではないかと、そういうのも学校にとっては参考になるんじゃないかと思う。

それから、木曾地域のよさとか、同時に存在する課題を子供たちに学んでほしいという願いが何人かの方から出てたんですが、それを高校で、小中高とのつながりも含めてですけれども、どんなことをどんなふうに教えることが考えられるかということを出していただけると参考にはできないのではないかと思います。

○**出席者** 木曾町中学校ですが、この夏休みの終わりごろを使いまして、青峰の理数科の生徒を補習の講師として学校にお招きして、宿題の面倒を見てもらったりとか、そういうことをやっていただきました。高校生の本来の力をこちらに来て発揮できるような、学校の中に自然に入れていく、そういうレベルでの中高の交流、子供たちの交流ができるということが高校に興味を持ってくれると期待しています。

例えば部活でも高校生と一緒にやってくれる、指導してくれるようなことがあってもいいという、そういう地域レベルでの、狭い地域でもそういう交流が高校のよさを伝えることのきっかけになる、興味を持つきっかけになると思います。

○**蘇南高校** 南木曾中学校の顧問、それから蘇南高校の顧問が個々に連絡がとれるようにしてあります。南木曾中学校で行っていた部活動を例えば合同部活でやってみるかというような話は出ています。

それから、南木曾町に小中高1校ずつですので、保育園まで入れて保小中高の職員が交流をしています。具体的には年2回の研修会を持ってあります。そこから、生まれてきたのが、高校の合唱コンクールに小学校あるいは中学校が来て、合唱を披露していただくというようなことも実現しております。

○**出席者** 生徒、保護者のニーズに応えるという意味で、親が我が子を行かせたいというのは、木曾においてどういう学びの場のある高校なのかを親に直接聞くということも大事ななど。

例えば中学校区での何らかの場での意見を聞く場とか、中学生の保護者へのアン

ケート、例えば今保育園とか幼稚園の親の皆さんに、10年後自分の子供たちがどういうところに通わせたいか、どういう願いを持っているかを吸い上げていく。それをしないと結局、よかれと思ってやったことに、ずれがあつて、結果として外に出てしまうのは、どういうところにあるのかということを考えていくようなことも必要です。

○出席者 親の立場からみて、高校を選ぶということなんですが、基本的には子供が行きたい学校、この学校に行きたいという意思があれば、それは尊重してやりたいというのがどの御両親でもそうじゃないかと思います。

学校の中でどういう目的でということが子供も十分把握できていないと思うんですね、その学校に入学してみないと。その中でも子供がこの学校に行きたいなということであれば、それを尊重してあげたい。一番大事なのは学校生活が楽しくなければ、本人も学校に通うのが嫌になってしまうと思うので、一番は本人の意思だと思います。

○出席者 先ほど見えないところを予想して子供たちを入れていくというところで、そういうところでは親としては不安も強くなったりしますし、また、自分たちが通っていたときとは高校の姿も変わってきていると思うんですけれども、そういった意味では、地元で高校があれば何となく様子を知ることができる。例えば文化祭とかで一般開放日があつて、そういったときに子供たちと一緒にいったりとかする中で高校の様子を知ることができたりだとか、高校でやっている活動を知ることができたりというところで、高校自体も見える化というか、オープンにしていると、親としてもこういうことをしているからこそ、こういうところに入れてあげたいなと思えてくるのかなということをお話を聞きながら思いました。

いきなり県外のところに行きたいとか言うと、親の不安、心配は尽きないと思うので、そういった意味での地元の強みというところは、あるということを感じました。

○木曾青峰高校 青峰の場合ですと、科が4つありますので、入る前にどの科で学びたいのか、普通科であれば入った後の進路に関してもまだ考えようという感じなんですが、森林科、インテリア科、理数科に関しては、特殊コース、体験入学で実際に授業に入ってもらいます。インテリア科だったら何か簡単なものを作業してつくったりとか、理数科も文系の生徒もいるので、授業を実際に体験してもらい、まだ中学生、本当にこの科でいいのかなと迷っているところを少しでもお手伝いができたらなと考えています。

○蘇南高校 蘇南高校は7月の下旬、夏休みに入ったところで体験入学を実施しました。1つはやはり授業です。60分の授業を2時間、選べるようにしている。、英語、数学から始まって、本校は工業、商業とありますので、そういったところを選ぶ。全体説明で総合学科とはどういうものであるか、そんな話もする。

そして、午後は部活動を見学して、学校の中をくまなく見てもらう。その部分でも我々職員が案内するのではなくて、本校の生徒が中学生を案内するというところで本校の生徒の様子も見てもらえらると思ってやっております。

閉 会